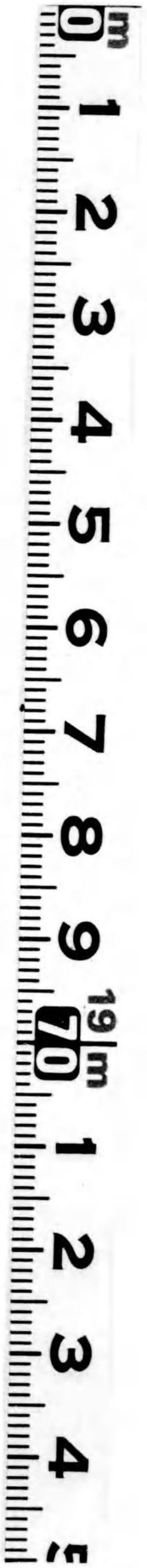
少年文庫
第七編

乃木大將

270
439

特



始

特100
378

少年文庫
第七編

乃木大將

大正
1.10.22
内交

乃木大將

（一）一郎修養の初め

大正元年九月十四日一郎が學校から歸ると、お父さんから乃木大將が殉死なさつて、其の夫人さんも自殺なさつたと聞きました。が。其の殉死と云ふことが解らないので、

一郎『お父さん。殉死とは何で死ぬのですか。……

父『乃木大將は忠義なお方だから、先帝陛下の御隨をして、神靈が天へ上らせらるゝに隨いて行く爲め自殺を爲されたのだ。

一郎は其の意味が充分解らないので又、

一郎『それでは誰でも、先帝陛下の御後から、自殺したらば忠義ですか。

父の眞一は此の質問に、答へに詰まりました。何となれば、人間の形迹上のことは、少年に話しても理が解りますが、精神的の理想のことは覺れかねます。こゝが德育の肝腎の處と思ふから、少年の純粹な軟かい頭腦へ持つて行つて、拙劣な答をしては生涯不良者にして了ふ。大切なことだと思ふので、急に答へませんで、眼を白黑して居ました。

一郎は父の心を知りません。無邪氣ですから、

一郎『お父さん知らないの？

父『乃木さんだから大忠義だ。……乃木さん程の心掛が無い人など決して忠義で無い。

一郎『乃木さんは、何んな心掛がありましたか。

父『先帝陛下へ大忠義の爲めに、日本國中の人の心掛が惡いのを、何の位御心配なさつたか知れない。それで、口で言つても書籍に著つて書いて讀ませても、却々改心しさうにも思はぬので、御自分が仰しやることゝ行さることゝを道理に外れない樣に成されて、これ見て考へろと、心の裡に考へておいでなされた。

實に神樣のやうな御方である。……と、自己は思ふのだ。其の樣な御方だからして、先帝陛下の死出の御隨して、日本國中の人の心の墮落して居る人等に、大きに氣を警け、改心させる御主意が有つたと思はれる。吾人が斯樣な想像して、間違つたら恐れ入ることだが、然うか知らと思ふのだヨ。乃木大將に常に此の有難い御心が有つた證據は、新聞や書籍にある、大將が平生の御行狀で知れる。

一郎『それならお父さん。坊に是れから其のお話を聽かせて下さいますか。

父『聽かすとも〳〵。お父さんが汝ばかりぢやない。お母さんにも

姉ちやんにも、二郎にも三郎にも、お愛ちやんにも、長松にも、權助にも、お爨にも皆に、今晩を初めとして、毎晩お夕飯了つたときに二時間つゝ位、寢る迄の間に、成るべく話して聽かせよう。

一郎『それは嬉しいことです。何卒聽かして下さいませ。

父『ウム。賢い〳〵。……それでこそお父さんの兒ぢやわい。

父の眞助は、此の動機こそ家庭德育の好機會と思ふので、乃木大將生存中の言行を、誠を罩めて家族の者へ、解り易く話して聽かせます。

(二) 家庭德育 一、

お父さんは約束通りに、其の後毎晩、暮早々、成るべく續いて話し

て聽かせました。

父『乃木大將の生立の時から話さう。が、御先祖御家系から、其のお父樣の御氣質、御教育ぶりを先に曰はう。

大將の御先祖は、日本歷史で能く知つて居る、宇治川の先陣を成さつた鎌倉大名、近江源氏の嫡流の、佐々木四郎高綱で、此の高綱は後に山陰道の出雲の國、今の島根縣內に在られて、卒去れになつて其地に御墓がある。其の御住居なさつた地を乃木村といふたので、大將の家の御苗字を乃木と付けたと申すことだ。

高綱が卒去れになつた後、世は北條、足利の世になり、毛利家は大內と云ふ大諸侯の部下だつたが、獨立して、應仁亂後の諸侯

になり、織田信長、豐臣秀吉の世を經て、德川時代に長門、周防の太守になつて、其の御分家に長府侯といふのがあつた。下の關附近の、豐浦郡長府村に御座つた。大將の御先祖は其の長府侯に代々事へて家臣になつて、お父樣の十郎希次といふお方の代には長府侯の御傅役を勤めて居られた。此の方は非常に忠義心が篤い嚴格なお方で、お母樣は常陸の土浦藩の土屋家から嫁られ、これも非常に賢い夫人であつた。

お父樣が江戸詰と云つて、今の東京の地の御邸に勤番と云つて住つて勤めて居た時、乃木大將は今の麻布區、麻生日ケ窪で生れ十歲前後までは、江戸に居られた。親と云ふ者は誰しも同じく兒

が可愛い丶。處でお父様の十郎様は、賢いお方だから御兒も賢うしようとて、教育、家庭德育の爲めに、時々大將を伴れて、芝高輪泉岳寺の、赤穗義士の墓へ參拜しられた、赤穗義士は大石良雄はじめ、四十七人は皆忠義な人達だから、武士は第一其の心が無くてはならないので、そんな賢い人達が日本に居たといふ證據の爲めに其の墓を見せ、拜ませ、其の事實、苦勞して主君の仇を討つたことを言つて聽かせたい爲めであつた。其の後は十郎様が、今恰ど此お父さんが親切に、汝等に話をすると同じ心で、同じ目的を期したのだ。……これが眞正の兒可愛がりで、世間の猫可愛がりで無いのだ。……

處が大將の十一歳位の時、お父様が國詰と云つて主公から命ぜられて、御國の長州長府へ歸り、御國勤をすることになつた。其の時分には江戸から長州まで長の道中、二百何十里と云ふ遠路、今の様に便利な汽車が無かつたので、東海道を京都まで、それから中國街道を長府まで、テクく〳〵と歩いて道中をした。……此の際お父様が嚴しいから、駕籠にも馬にも乘らせずに、通しに歩かせたのだ。普通は道中するには、十歳や十一歳位の少年は、駕籠にでも馬にでも乘らせるのだが、大將はお父様やお母様と同じやうに、歩き通して、幾日かの旅を重ねて、漸と長府の入口の、外浦と云ふ地へ着いた。

さア是れから亦、普通では無かつた。

一郎『何んなことですか。

父『直ぐと旅舍へ着くので無し、親類へ着くのでも無くて、

一郎『露宿ですか。

父『然うでも無いが、此地の野原へ幕を張り廻して圍ひをして、其の中で一家の人が皆々旅裝束を解いて、服裝を更へて、直ぐと主公へ只今歸りましたと申し出て、主公の御命令で空邸へでも入つて住はれたが、其の邊の事は確と聞かない。

それから日が經つてからお父樣は、二之宮と云つて　神功皇后を祀つてある神社の側の、横枕と云ふ地へ、三百坪（田地一反歩

の地幅）ばかりの邸を搆てたが、それも母家なしの長家だけで、間數は六疊、三疊、二疊の三室と、一坪（疊二枚敷）の板間だけで、來た客は常も腰掛けて話すのを例とした。

母『大將は幼年、母堂は婦人の身で、歩きつめの長道中、嘸お足の痛んだことで御座いませう。

父『まだ、大將のお母樣の話がある。それを亦。……汝聞きなさい大將の母堂は常も自分で髪を結はれたさうだ。武家の宅へは女髪結は入らないが、誰かに結はせたのだが、母堂が斯樣だつたから婦人が自分で髪を結ふのは乃木家に限つたとの事であつた。以前の女の髪は結ひ難かつたヨ。今のハイカラ髪と異つてサ。

婆『えらいお方ですねへ。

父『然う云ふ家屋だつたから手狹い。であつたけれども室の内には棚を設いて、槍、薙刀、刀劍の類を飾り、入口には臺拵と云つて米を舂く碓が据ゑてあつて、大將の兩親は交る〳〵に米を舂き其の間には大將と弟の眞人樣といふのとが舂いたさうだ。

(三) 家庭德育 二、

乃木大將は幼い時、身體が虚弱て活潑な遊戯などは出來ない程であつた。それで常もシク〳〵と泣いてばかり居られた。……それでもあるまいが幼いときの名を無人と稱はれた。それにも拘はらずお父樣は

嚴しい上にも嚴しくて、食物に好惡があつてはならない。何でも食い慣れて置くが肝腎だ。然なくば一朝戰場に臨つて不自由することがある。と曰つて誡しめ、胡蘿蔔でも、蒟蒻でも、好惡ひする者があると、故意と意地惡く、惡いと云ふ食物ばかりを、幾日も續けて食はせ、漸くそれが食べられるやうになると、始めて他の副食物に換へることにしてあつたさうで、大將が粗食に慣れて、後に體質が健くなつたのも素因があつたのだ。

そればかりで無く、御飯を出さなければならないお客のある時は、其の膳部を宅で製へずに、いつも料理屋へ案内して馳走せられた。それを不經濟と思つて他人が忠告すると、「否。然うで無い。若し宅で料

理を取つて馳走すれば、殘り物が出來る。それを兒等に與ると、自然と奢侈の心を生ずから、此の方が反つて經濟だと曰はれたさうだ。食物には斯樣儉約であるから、他の家とは異ふ處があつて、お父樣は忙しいときには晝と晩との分を朝一回に食ひ置くといふ流儀であつた。大將等も此の流儀に仕込まれたので、乃木の食置と言へば誰も知らない者は無かつたさうだ。而して又乃木家の握飯は一種風變りで、米と麥と半々の中へ梅干を入れて、其の周圍へ醬油を着けて燒いたものださうだ、これに慣れた大將だから、其の後榮進しられても、休職のとき下野の那須野に居て、稗を作つてそれを炊いて食べて居られたとの事である。

大將の家は祿を百石（一年に）ばかり貰つて居られたが、家族の人員が多かつたので、生活は極めて貧乏であつた。それで衣類なども、お母樣はお父樣の着古したのを張直して、仕立直して、いつも筒袖にして、大將兄弟に着せるのが例であつて、其の筒袖の袖口に紐を通して、水仕事をするときには括り上げるやうにしてあつたさうで、此の筒袖は當時乃木家に限られて居り、それに短い袴を着けさせられて居り、髪を結ふには普通の元結を用ゐずに、一種の打紐で結ふ定めにして、其の紐を何回も使へるやうにしてあつたさうだ、これだから贅澤は言へない。

『其の御風體では寒中などは寒いでせう。

父『さ。それに就いて話がある。……一日大將が、寒風が吹き止まない寒中の寒い日、寒くても重ね着せず、又足袋も穿かない大將が、幼な心に只一口、「寒い」と曰はれた。世間の猫可愛がりの親ならば、オー寒からうと曰ふ處だが、大將のお父樣は格別で、「否寒くは無い。是しきのことは耐忍しろ」と曰ひすて、井戸側へ行つて、間も無く大きな水桶に、寒たい水を汲込んで荷いで來て、大將の頭の上から、ザブンと一齊に浴せかけて、「無人よ。最早寒いことはあるまい」と曰はれた。是から大將は、至極寒い日でも、寒いといふことを曰はなくなられた。

お父樣は兒島高德同樣の武士とも稱はれた人で、剛氣な人だか

ら、甲冑で身を固めて、晝夜驅け通して自己の體力を試したことがあり、又寒い夜中に露宿して試したこともあつた。大將はこれを見て、無言の教訓を受けて居られた。さて大將が學問修業(修身學)は、暫時の間は土地の漢學者の、結城某といふ人に就て教はつて居た。其のうちに御一新前の騒ぎ、尊王攘夷の論が喧ましくなつて、何時戰爭が始まるか知れない時世になつたので、藩では集童館と云ふ學校を立てゝ、少年を教育することになり、熊野眞介と云ふ人が館長で、福原扇馬と云ふ人が教授で、館の生徒は十歳から十八歳迄とし、他所から入込む者は食ふ玄米を持つて來て、自分がそれを舂き、自分が山へ入つて柴薪を取り、自炊

する制度で教育した。此の日課は修身上の學問、擊劍、馬術、相撲銃砲うち等で、一六の日を休日と定め、此の日には各自に意見を陳べさせることにして、當番の者が一個の箱を持廻ると、館の生徒は皆、自分の意見を書いて其の中へ投れ、それを熊野、福原の兩先生が調べて、賛成論者と反對論者との二組に區別し、大きに討論させ、結局は兩先生が可否を決することにしてあつて、それから兩先生は、單辯口議論の能く出來る者ばかりを採らずに、常に言ふことゝ行ることゝ一致するを主として、膽力の強い弱いの試驗をした。夜の十二時過になると、誰は何處の新墓へ行け、誰は獄門の首を見て來い、誰は狐の穴へ目標を付けて來いと云ふや

うに、それ〴〵命令通りに行せ、其の後から檢査役が檢分をして合格者を定める規定であつた。處で大將は、常も言ふことゝ行ることゝが一致して、優等を占めて居られた。……抑も此の時分からして人格が、普通の者とは異つて居たのだ。

或る時大將のお父樣が此の集童館へ來て、先生に會つて、「無人は家に在た時、粗食には慣れ、寒いとは言はないやうになりましたが、館内での成績は如何ですか」と聞いた。すると熊野先生は「將來私が必ず立派な人物にして見せます」と誓つたことがあつた又、一六の休日の意見述べの時に、先生が館の生徒中の或る者を指名して、楠公の遺命狀を朗讀させる定めであつたが、大將は時

時此の光榮ある朗讀者になつた。其の後集童館が廢止になつたが當時大將は十六歲位だつたさうだ。

(四) 外出修學

父『大將は年が經つに從つて、大分身體も强健になつたので、同じ長州萩本藩の儒士の、玉木文之進先生方へ、學僕と云つて、今言ふ食客生に遣ることに、お父樣は決心して、さて大將に向つて、人間は學問(修身學)をしなければ駄目だ。貧乏はして居るが學問はさせる。併し、學費を送らずに、玉木家の厄介になるのだから其の代りに薪も採つたり、畑の手入もしたりしなければならない

若し其の辛抱が出來なければ家へは入れないが、それでも承知か」と言つて聞かせられた。(實は學費を內々で玉木家へ納めたのだが身の爲にとて斯樣言つたとの事である) 大將は「承知で御座います」と答へて、長府を出て萩の玉木家へ行つた。

さて玉木先生方へ來てからは、更に學問などをさせて呉れさうにも無くて、山へ薪を採りに遣られたり、畑の仕事にばかり追使ふだけであつたが、大將はそれでも辛抱して居た。……親の命令は神樣の御申付と同樣に思つて居られたのだ。

斯樣辛抱して居ると、其の中に玉木の夫人が畑へ出て來て、種々指圖をしながら、外史や何かにある事柄に就て質問しられるの

で、大將は食事の際に、僅の時間を利用して、其處此處と調べて翌る日答辯すると云ふ風に仕込まれた。併し、これは書籍の上の學問より一層益を得たらしいといふことである。と云ふは、逸して學問したのは効が薄い。苦勞して覺えなければ。頭腦に深く入らないからだ。汝等は能くこれを心得なさい。逸だ面白いとばかり思ふのは宜しくない、實際に間に合はすことゝ思はなければ駄目だヨ。

大將は斯樣して居たが、玉木先生は本藩の學校明倫館に入れ、此の學校で一年ばかり勉學した頃、長州は尊王攘夷の件で、德川幕府から兵を向けて、これを防いで應戰することになつた。此の

時豐前の小倉侯は、幕府の命令で長州を攻める側で、長州は、ナニ小倉がと、直ぐ海向ふの小倉を襲ひ、小倉城を燒き、小倉侯は遁げた。大將は初陣で、小倉攻の隊に加はり、輕い負傷で歸り、さうかうするうちに、幕府の軍は敗けて退き、戰爭は終つたので、復た明倫館へ入り、三年間勉學して長府へ歸つた。これが明治元年の年の暮であつた。此の際に諸藩から佛蘭西式の練兵生徒を出せと、兵部省から命令があつたので、長府藩からは大將を選拔して出した。依て大將は出京して、其の訓練を卒業して歸つた。これは明治二年の十二月であつた。歸つてからは頻りに佛蘭西式練兵の必要を唱へ、更に藩主へ建白した。此の時將軍は二十二歳で

あつた。藩主は、それは可いと思はれて、採用をして西洋の練兵式を興して、乃木さんから傳習させて、藩士一般にそれを覺える勉强を爲せられた。

其の後大將は、明治四年に、陸軍少佐に昇られた。尤も始から一足飛に佐官にはなられない、矢張り明治三年頃、日本の陸軍少尉になつて、中尉、大尉を經て昇られたのだが、速い昇進であつた。處が明治九年に前原一誠と云ふ高官が、辭職して長州へ歸つて、國家の爲と言つて亂を作した。其の際乃木大將は、熊本鎭臺の分營の、豐前の小倉の第十四聯隊長になつて居た、處へ弟の眞人氏が、前原一誠に味方して、兄樣の乃木大將をも味方に付けんとし

て、態々やつて來た。弟の眞人氏は豪邁な人で、今は前に大將が學僕に行つて居た玉木文之進先生の養子になつて、玉木眞人と稱つて居る。さて眞人氏は單身で密と來たので、是非に前原に味方して呉れ、つまりは國家の爲だと曰つて、强請つて試たが大將は何してそんなことを聞入れるものか。赫とばかりに腹立てゝ、「それは何たる心得違ひぞ、汝今自分の言を用ゐずして、不心得を改めなければ、此場を起たせない。殺して了ふぞ」と曰つて怒つた眞人氏は、惡かつたと後悔したが、惡いことでも武士が、一旦受込んだ約束事は、變改は出來ないと心で思ひつゝ、表面では兄樣に、「止めます」と曰つて謝罪つて長州へ還り、前原黨の爲めに

官軍と戰つて討死し、養父の玉木文之進氏も、先祖へ申譯が無いと曰つて、七十三歳で、代々の墓の前で、腹切つて死んだ。

いろ〳〵前に曰つた通りで、勉强な、誠實な、忠義な、道理のわかつた、感心極まる心掛、良い行狀であつた。

(五) 西南の戰爭

父前原の亂があつた翌る年の、明治十年に西南戰爭が起つた。此の際は中佐で、矢張り小倉の第十四聯隊長であつた。夫の鹿兒島の賊軍が肥後の熊本へやつて來て、熊本鎭臺の熊本城は籠城する。小倉は其の分營だから城を攻める賊軍を第一番に討攘ひに行かな

ければならないので、此の年の二月二十日、小倉から軍を繰出し此の乃木軍の第一戰は、肥後の植木に開かれた。けれども乃木大將は戰爭の計略を考へる、策戰上の事故があつて、繰出す日は小倉に駐まり、聯隊長の一段下の、畑第三大隊長が軍を率ゐて戰爭に出た。夜の戰爭だから、畑大隊長は聯隊旗を體に纏ふて居たが激しい戰爭が數回で、官軍が大きに敗けて、畑大隊長は終に戰死した。主腦を失したが爲めに我軍は、戰死した隊長の死屍さへ收容ける隙が無くて敗けて走げた。此の時聯隊旗を奪られたのだ。

後れて急いで來られた乃木將軍は、賊軍の敵地に我が聯隊旗が樹つてあるのを見て、始めて我が軍が敗亡たと知り、「ア、我が

聯隊旗を敵手に奪られ、面目ない事だ。軍人の面目は果なつた」とて、齒を喰ひ切り、腕を扼つて、殘念至極に思ひ、聯隊中で戰死し殘る兵に言付け、敗けた辱を雪ぎ、聯隊旗を奪返せと命じた

其の翌日の二十一日に、木葉口の敵を一擊せんとて、激しい戰爭が開まつた。此の戰爭に敵の將、篠原國幹が戰死して、畑大隊長に代つた所の吉松第三大隊長を首め、十數人といふ士官が戰死した爲め、總軍が平潰れに潰れて、退却しなければならない場合になつた。

處が豪氣な乃木大將は、單騎止まつて敗ける勢ひを挽回して、一擊に敵を敗さうとして兵を叱咤り、成る限りの勉强をしられた

が、賊軍の勢ひが此上なく猛獄くて、而も狹い木葉の町は、全で賊軍から挾擊を受ける地になり、縱からも横からも、大砲と鐵砲との亂射に逢ひ、到底命を捨て守る望みも無い所から、將校も兵卒も大將に退却を勸め、總掛りになつて、無理に引摺り行かんばかりに、漸々退却して貰ひ、それから數度、小さい衝突はあつたが、何分敵は慓悍くて、我軍は其の正反對で精鋭とは言へなかつた。それで以て、いかに勇猛い大將が有つても、大體退却することが多かつた。けれども奇觀なのは、大將の退却は常も部下の將校兵卒に賴まれて、已むを得ず退却された。これ丈は乃木軍の特色として、當時全軍の話の柄に上つて居た。それから三月の七八

日頃、高瀨の戰爭に、大將は右の足を貫通かれたので、久留米の病院に收容しられて、凡そ二週間ほど治療を受けたが、銃砲の聲を聞いては病院の中に居ることは出來ない。戰爭に熱心な大將は軍醫が制るのも肯かずに病院を飛出して戰爭の號令をかけた。足の疼痛の爲めに、馬に乘つて右の足を伸べることが出來ないので足と頸とに繃帶を繫けて、馬上で指揮をして居つたが、或る時は馬の通じない細道を走らなければならないことがあるので、畚に乘つて兵卒に擔がせ、畚の中から指揮せられた。

大將は聯隊旗を奪返すことが出來ないので、申譯に腹切つて死なうとしられた。それは熊本城内での出來ごとだ。樺山參謀長が

負傷した爲めに、乃木大將は其の後任を命ぜられ、其の頃の參謀總長の、兒玉將軍を助けることになり、兒玉將軍とは一室間てゝ同じ城内に居た處、或る夜の眞夜半の頃に、短刀を腹に突立てゝ死なうとしたのを、兒玉將軍が知つて、短刀をもぎ取つて止めたことがあつた。實に固くるしい正忠正義なお人だヨ

奪られた聯隊旗は、戰爭が終つてから。賊軍の村田三介の家にあつたのを、陸軍へ取返されたさうだ。

(六) 日清戰爭

父『其の後明治二十七年に日清戰爭が起つたとき、乃木大將は最早

陸軍少將になつて居られて、混成旅團長で兵を率れて出征せられ其の翌る年、明治二十八年の一月に、滿洲の蓋平城を攻陷し、それで豪いと稱はれて、武威が大きに揚つた。……名が高くなつた。

此の蓋平城を攻陷された頃の前後に、まことに敎育になる感心な御心掛がある。これこそ聞いて置くがよい。其の頃の主計官、池田純孝氏の談とあつて、新聞紙に載つてあつた。池田氏が曰はれるに、想ひ出せば日淸戰爭の際に、乃木大將は故山地第一師團長の部下であつて、旅團長であつた。山地師團長は誰も知る通り豪膽の人で、乃木大將は細かく心を用ゐる周到く人であつた、自分は當時糧食部に在たが、明治二十七年に大將に隨つて金州城に

在た。當時は多數な捕虜の將校兵卒が有つて、自分は之れに大豆を供させようと思ひ、部下に申付けて大豆を贈つた。處が乃木大將は此の況を觀て大きに驚かれ、態々自分を麾して、痛して叱責られた。何と曰つて叱責つたかといふと、「勝つも敗けるも戰爭の習ひである。捕虜は戰爭には敗けたが、猶且戰場に止まり、飽くまで奮鬪を續けて、遂に捕虜になつた者だ。それを冷に遇ふべきものでは無い。今此の名譽ある淸國の將校兵卒に對して、大豆を供せるとは以ての外の事だ。今からは斷じて大豆を廢して米穀を與れ」と曰はれた。自分はこれで氣が付いて、慚愧る念慮が深かつた。ア、大將の心がけは格別だ。自分が不所存だつたと思つ

たので、直ぐと大豆贈りの命令を取消して、これから捕虜を優に遇つた。

尙ほ感心したのは、其の同じ年の秋で、空も晴れ渡つた一日、糧食部の要務で、四方を巡視つて、近く天長節を迎へるに際し、愛顧を蒙る乃木將軍を慰めようと思ひ、フラ〳〵と行くところが偶と見ると支那の民家に、眼が覺るばかりの、美くしい黃菊白菊が咲揃つてゐるから、これを手に入れて大きに喜び、十一月の二日の夜に乃木將軍の陣營を訪れ、贈つた處が將軍は大喜びで、さて曰はれるには、「此の砲煙彈雨の中に在て、明日は天長節。故國に在れば菊の花の咲亂れるのを觀るであらうにと、それを偲つて居た折柄

此の美くしい菊を得ようとは思ひも寄らないことであつた。明日は此の菊の花を、部下の將校兵卒と共に觀て、大いに佳節を祝はうとであつた。此の菊の花は天長節が過ぎてから後も、乃木將軍の机の上に置かれて、自分が培養して、陣營の徒然を慰められた。

それに引續いて蓋平の戰爭に、我軍が大勝利になつたのは、實に乃木將軍の偉功であつた。當時海城から援軍が來るべき約束があつたが、時後れて來たので、其の功が無かつた。此の時に糧食部に、清酒を一樽保存て居たから、蓋平の大勝利を祝ふ爲め、それを乃木將軍の許へ贈つた。これも將軍は喜ばれて、部下の將校兵卒を集め、さて「今茲に一樽の清酒が有る。蓋平の戰爭に勉强

して吳れた慰勞として、酒を飲まうとする。併し、此の清酒に限りがあるから將校兵卒の區別無しに、支那茶碗一箇づゝ持つて來い」と命じ、一碗づゝ清酒を分配して、それで殘つた清酒を、悉皆樽の底を打いて海城から來た援軍に分配せられたとの事だ。是等が誰にも一視同仁で、遲刻した援兵にも、片みうらみの無いやうに、飲ませられたが格別で、實に閣下の特色だ。

（七）日清戰爭凱旋後

父『日清戰爭の凱旋後、明治二十八年の四月に、乃木將軍は陸軍中將に進み、第二師團長になり、九月に南部臺灣守備隊司令官に補

せられ、二十九年の十月に臺灣總督に任じ、三十一年の十月に第十一師團長に遷り、三十五年に迷惑な事が起つた。これは日清戰爭のときに、軍人が分捕した事件で、此の件が起つて世間の論が囂しかつた。乃木將軍の迷惑と云ふは、間わるくも其の部下の者に、支那の物を分捕した者、職分を瀆した者があつたので、旅團長として其の上に在つた將軍は、自分は惡いことは無いのだけれども、自分の罪だと曰つて其の罪を被り、責を引いて辭職しられ三年の間退隱て居られた。

一郎『お父さん。分捕したら惡いのですか。彼の神社に在る敵の大砲や、日本で名を變へた敵の軍艦。あれは分捕品ぢやありませんか

父『あれは戰利品だヨ。戰利品は戰爭しあふ國として取るのだから當然だ。分捕と云ふのは、國で無しに一個人が受るのだからいけないのだ。解つたか。

一郎『唯わかりました。

父『此の間は埋れ木同樣で、御迷惑であつた。退いて居なさる休職中に、栃木縣下の那須野原の一部を開墾して居なさつたことがある、粗末な家に在つたので、人が普通の農家と思つて居たといふことだ。依て其の御風體も、農夫の樣であつた。其の銅像が、乃木閣下の竹馬の友で、長州の長府の桂彌一といふ方が持つて居られる。銅像は閣下が開墾して居なさる農夫の姿で、長が一尺二

三寸で、黑い襦袢を着て、股引を穿いて、麥稈の勞働帽を輕く冠つて、左の腰に長柄の鎌を刺し、右の腰に火の用心と書いてある袋煙草入の樣な形ちの煙草入を下げ、草履を穿いて斜ひに、天を仰めて居なさる像だヨ。那須野に居なさつたときは、取分け平民的で、或る時行軍があつて、一群の兵卒が、乃木家の佗住居たる別莊を、普通の農家かと思つて、椽側に腰かけて休み、夫人に蒸した甘藷を饗れ、何とも思はずに食べて、暇を告げ禮を言ふて去たが、後に乃木樣の夫人だつたと知れて、驚いて感服したと云ふこともあつたのだ。

此の時分に今の陸軍々醫總監、石黑男爵の許へ大將が和歌を詠

んで贈られたことがある、其の和歌は斯樣だ。

三月八日に感あり

うもれ木の花さく身にはあらねども

こままもろこしの春ぞまたるゝ

と云ふので、石黑男爵から、

うもれ木にさくは櫻の花ならで

こままもろこしの雪にぞありける

と云ふ返歌を出した。すると又大將から郵便で、

雪ふれば枯木も花のさくものを

うもれ木のみぞあはれなりける

と云ふのを寄せられた。埋れ木と思ふ御心中が察しやられる。御氣の毒なことであつた。

(八) 日露戰爭

乃木大將は永く退いて居られて、自分にも埋れ木と思ひ、面白くなく過して居られた處、日露戰爭が起つて召出されて、其の難關たる旅順へ向ふので、一身を國に捧げる機會が至たとして、喜んで雀躍して出征しられた。先づこれを運の開けと謂はなければならない。

大將は斯樣いふ意氣込でであつたから、乃木軍は勇ましく戰つた

けれど、世界に今一つ無いと稱はれた旅順の守りは却々固かつたそれで彌々猛い心の一徹に、堅い壘に向つて急攻した結果、此の世が始まつてから無い悲慘しい攻城の戰爭が始まつた。就ては大將が豫て愛撫せられた幾多の軍兵を死なせた。全體乃木大將は憐み深くて、人を愛する方で、寒い夜でも兵卒と偕に露營する優しい心を持つて居る方は、此の際定めて堪へられない心の中の悲しさ哀れさを感じなさつたであらう。大功は立てられたが、多くの兵を死なせたことが、其の父兄に濟まんと曰ふて、常に氣の毒がつて居られ、功を立てたことなどは、少しも心に留めて居なさらなかつた。是等が有難い心がけの御方だ。其の氣の毒だと思ふ中

にも長男の中尉勝典氏、次男の少尉保典氏の二人を戰死させたので、これで少しは心を慰められたであらうと察しられた。

此のときは陸軍大將に進んで、第三軍の司令官であつた。目的を達して敵將ステッセルに開城させたときには、其の英名が萬國に轟いて、誰も驚き感じない者は無かつた。それに大將は毫しも功に伐らず、米國の名も無い人からの信書に、多忙い中から答辭をしてやられた。全體大將は、人と人とは內外に關せず、身分の貴い賤いに拘はらず、誠を盡し合ふべきものと觀念して居られるのだ。新聞紙の報ずる所に據ると、北アメリカの合衆國の、ボストン市を西南に四十哩距れた大西洋の沖に、掌ほどの大きさの

一つの孤島がある、島の名をナンタッケットと呼ふ。此の島に、前は兵卒であつて、今は落花生賣をして居る、ジョセア、ガードナーと云ふ五十餘りの人があつて、明治三十八年旅順開城の時分に、此のガードナーの娘が、ボストンで男の兒を生んだ。ガードナーは兒の祖父だから、「お父さん此の兒に名を付けて下さいと娘から求めて來た。ガードナーは、「自分も南北戰爭の軍人だッたのだ。男の兒は無かつたに娘が男の孫を生んで呉れた。切ては孫に後年に、勇名を世界に轟かせたい。それに就ては孫の名を、現在の世界で第一の軍人の名を取らうと思ひ、あれか此れかと世界の勇將を指折つて考へて居たに、旅順の大功ある乃木大將に限ると

決心して、孫に、ノギ、ガードナーと名を付けた。けれども考へるに苟くも世界の大勇將の名を取るのに、無斷で取るのは禮儀で無いと心付き、一書を認めて旅順陣中の、乃木大將に贈つて、其の主旨を述べた處、大將は直ぐと承諾の葉書を出された。其の葉書には、表面に「ジョセア、ガードナー君と、英字で宛名を書き、文面は毛筆で、「御厚意を謝す。明治三十八年七月十日、出征第三軍司令官乃木希典」と書いて出された。ガードナーは文面の意味が解らなくて、乃木大將が承諾して下さつたか、下さらないのか知れず、氣に掛けて居た處、日本人の瀧山某が此の島へ避暑に行つて、ガードナーから頼まれて文面の意味を說き聞かせた。ガード

ナーは喜んで安心して、瀧山に前に將軍に賴んだ話をして、「左樣であるか。今貴君の說明で、乃木將軍が快く承諾して下さつたことを知つた。知ると共に乃木將軍が、千軍萬馬の間に在りながら、見知りもしない外國の我等に對して、斯樣も懇切な返書を下さつたかと思へば、益々追慕の念ひに堪へませぬ。予はこれを家の寶にして、孫のノギ、ガードナーに、必ず其の名に恥ぢぬやうにさせますことを誓ひまする」と、嬉し涙に咽んださうだ。

(九) 日露役の凱旋後

父『日露戰爭終つて凱旋後は、男爵より伯爵に陞され、從二位勳一

等功一級伯爵になり、軍事參議官で學習院長に任じられた。院長に就ての話もするが、此の際に旅順の、露國戰歿將卒弔魂碑の除幕式擧行の參列に行かれたときの話をしよう。……時は四十一年の六月で、除幕式當日夜會の席上には、露國側の參列員中に、現に松樹山に楯籠つて、白襷隊の斫込を受けて負傷した者や、黃金山の砲臺で負傷した者や、其の他種々の戰歷を有する人が居た。中にも砲兵大尉のヴアーネーフと云ふ人は、東鷄冠山北砲臺で、一部隊の指揮に當つて、立派に鬪つた人で、四十ケ所餘りの重傷輕傷を受け、遂に人事不省になつた儘、伊豫の松山の俘虜收容所に送られた武人であつた。此の事を聞かれた乃木大將は、トンと

床を踏鳴らして起ち上つて、其の樣な勇士が此の席上に在らうとは知らなかつたと曰つて、ツカ〳〵ッと大尉の前へ進み寄り、其の兩手を固く握つて振り動かし、遂には互ひに抱き合つて、暫らくは離しもせず、今は大將も感じが迫り胸が塞つた。それから强く口重い口調で、「凡そ敵として最も恐るべき人は、味方として又最も賴むべき人である」と、曰ふや否や滿々たる、三鞭酒をグッと一息に飲み干しながら、日本流は斯樣すると曰つて、手づから盃をば大尉に與へられた。大尉の感激は言ふまでも無し、此の光景を見て居たゲルングロス將軍や、チ、ヤコフ將軍などは、感心して止まなくて、「此の神の樣な老人は、果して幾歲の壽命を保つ

か」と、嬉し叫びに叫んださうだ。

敵であつた露國の砲兵大尉でさへ、其の君國に忠勇なのを好かれる大將だから、況てや自國の廢兵は、我が身も同樣に思つて同情を寄せられた。大將が殉死の後に、川崎廢兵院長の話に、「乃木閣下ほど廢兵を憐れまれた方は無かつた。月に一回か二回は必ず訪ねられるし、殊に三月十日の陸軍記念日には一々其の部屋を見舞つて、「何うかな〳〵」と慰める言を下さるのが常であつた。忘れもしない、明治四十三年正月元日の夜の引明けた、私は未だ出勤して居なかつたのだが、將軍は突然に廢兵院を訪なはれた當直の人はそれを見るなり、直に迎へて案内しようとしたが、將

軍は「勝手は解つて居る。」と曰つて、スタ〳〵と各自の部屋〳〵を見舞はれて、皇后陛下から賜はつた紅白の餅を、手づから廢兵に分配された、

又、將軍は、餘り書を書いてやることを好まれなかつが、戰死者の墓碑銘だと言ふと、いつも喜んで書かれた。これに就て將軍の厚い情愛を思ひ出す話がある。これも四十三年の秋の頃、岐阜の或る人から書を書いて戴いた御禮として、干柿一箱を贈つて遣したことがあつた。將軍はそれを其の儘廢兵院へ寄贈せられた。其の時の添手紙は斯樣である。

拜啓　愈　御健勝欣賀々々先日墓碑相認め　候　答禮として蕪包

干柿一箱到來候間其の儘貴院に寄贈仕候御分配被下度候尚其の内二三を小生へ御返付被下候はゞ賞味可仕候色々御手數之儀不惡御宥恕可被下候右御依賴迄匆々頓首

希典

八月二十日

川崎院長殿

これは將軍の心では、折角呉れたのに自分が一つも食べなければ贈つた者の好意を空しくする。又總てを皆々食用するに忍びないとの意であつたゞらう。此の他折々地方から名物を貰はれると、何時も荷造りの儘で此の院に寄贈されると曰はれたさうだ。何さま、誰も同じやうになされて、氣の毒な人ほど憐れました。

（十）殉死の前

父『學習院は隨分情弊があつたさうだ。處が大將が院長になつてからは、大きに風を改められた。

一郎『學習院と曰ふのはお父さん何ですか。

父『此の上ない尊い學校だ。上は皇孫殿下、皇族方の御子孫、華族の子達、又、多額納稅者で、貴族院議員の子も生徒だ。院長は其の校長さんだ。それで今回乃木大將が殉死せられる前、九月十日に、今の皇太子殿下裕仁親王殿下へ、御教訓を申上げた。

一郎『其のお話をして下さい。

諾々。話さう。これは九月十日に皇太子裕仁親王殿下が陸海軍兩方の少尉に御任官があつた當日の午前十時に、東宮御所へ參向して、波多野東宮大夫、村木東宮武官長、桑野東宮主事等が侍立の上、親しく拜謁仰付られ、先づ御任官の祝詞を言上し、尙、例になく長い時間の言上をした。其の大體を言へば、

「今日は御任官の御喜びを言上致す爲のみならず、少しく少官の微意をも言上仕りたくて參上仕りました。特に今回は、コンノート親王殿下の御接伴をも命ぜられましたれば、當分御殿へ參上致すことも遠退きますれば、尙更此の際殿下の御將來に就き愚存の在る所を申上たう存じます。願はくは御聞取置きあらせら

れんことを」

と、前提をして、懷中から「中朝事實」と云ふ一冊の書籍を取り出し、それを殿下に献じて、語を改めて、

「此の書の中には、將來殿下が一天萬乘の尊きに立たせらるゝ時最も御參考となるべきもの多きを信じ、其の要所には小臣が、自ら朱點を附けて御座りますれば、吳々も御精讀御玩味を希ひ奉る次第で御座りまする。勿論、目下御幼少の御事にて、文中に或は御難解の所もあらせられませう。其の場合は近侍の者に御尋ねを賜はり、又、説明を仰付けらるゝも宜しう御座りませう。殿下は陸海軍將校として、其の實地の御見學もあらせられませうが、此

の外皇太子殿下として更に御必要の御學問もあり、從來學習院にては、他の皇族方御同樣に御教育申上げましたれど、今後は特に皇太子殿下として御取扱ひも致しますれば、自ら從來よりは御科目も增加致しませう。明君英主たるべき天資を養はせらるゝやう、御心懸あるべきは勿論のことゝ存じ奉りまする。」

と申し上げて、尙、雍仁、宣仁兩親王殿下にも拜謁して、種々と意見ある所を言上して、其の終りに、

「御兄君裕仁親王殿下、今回陸海軍少尉に御任官あらせられたれば、御弟君たる兩殿下には、今後益御學事を勵ませられ、御兄君の御股肱とならせられ、十分邦家の御事に盡させ給はんことを

是實に希典一生の御願で御座りまする。」

と、申上げ終つて、退下せられた。誠實、誠忠であらう。これは十三日に殉死する覺悟であつたから、此の世を去る御暇乞に、最後の御教訓を申上げたといふことだ。斯樣いふ乃木閣下だから、七月に　先帝の御不例のことが有つてからは、殷憂が措まず。晨も夕も、學習院へ勤める前後は必ず宮中に伺候して、侍醫に御容體を問ふことは幾回であつたか知れなかつた。然るに七月三十日御崩御になつて、惘然自失したやうになつて、英雄の心膽も碎けたのだ。それから遺言狀にある通りに思ひ詰められて、遺言狀などは前日の十二日に認め、十三日には名殘の寫眞も取つて參內も

し、邸へ歸つてそれ〳〵用意して、召使や他の人を拜觀に出して置き、心靜かに自殺しられたのだ。

（十一）自殺の光景

父が是れまで話して聽かせ、一郎はじめ家族一同、畏つて聽いて居て誰も皆感心した。一郎は其の自殺の光景が聽きたいので、

一郎『お父さん。大將御夫婦は何の樣な御死に樣を成さいましたか。

父『さア。夫人の方はあまり悲慘しい御死に樣で、言ふも涙だから曰ふまいと思つたが、然う言へば話さうか。……始めは御夫婦が差違へて御死になさつたと聞いたが、實際は然うで無かつた。石

黒男爵が、直ぐ其の跡を見なさつた委しいことが新聞紙にあつたから、其のお話を取り次がう。

『それを聽かして下さいませ。

父『諾しい。石黒男爵のお話では場所は二階の日本室で其の實際は大將は、正服にズボンを押下げて、腹をば腸が出ないだけに二回切つて居た。其の時用ゐたのは洋刀仕立の日本刀で、腹を切つてから咽喉を突く時には、刀の刄を内らに向けて咽喉部を、右から刺込んで左の後ろに貫き、頸動脈氣管を切斷して息が絶えたと見える。されば大將が先づ腹を切つて、咽喉を刺して死に、夫人は大將の最後を見届けて、心靜に死んだものらしい。それは遺

書中に、夫人の宛名があるのを見ても明らかだ。又、夫人は夫の死ぬのを見届けて、後に何ういふ風で死んだかといふと、第一期の喪服で、鈍色の袿に柑子色の袴を穿いて居た。自殺に用ゐた刀は一尺餘りの懐劍で、白鞘に納めたもので、創は四所あるが、一所は創といふ程でも無い。先づ三所の創に就て言ふと、第一の創は胸の眞中を刺して居るが、胸骨があるから深く入らない。第二の創は左胸骨の側を刺して居る。深さは一寸五分位で、肺を刺して心臟の一部に觸れて居る。併しまだ死にきれぬ。それでまだ忍耐して劍の身を握つて心臟部に當て、もう刺す力が無いから身體を以て其の上に乘懸り、身體の重量で懐劍を心臟に突き通したの

だ。……と日つて居られる。實に壯烈なことだ。

（十二）遺言十箇條其の他

遺言狀といふことを日つたから、一郎は遺言狀は何んなのかと聞いたので、父は新聞紙から寫したのを取出して見せて、それから皆に讀んで聞かせました。それは、

遺言條々

第一　自分此の度御跡を追ひ奉り自殺候段恐入候儀其の罪は輕からず存候然る處明治十年の役に於て軍旗を失ひ其の後死所を得度心掛け候も其の機を得ず

皇恩の厚きに浴し今日迄過分の御優遇を蒙り追々老衰最早御役に立ち候時も餘日なく候折柄此の度の御大變何共恐入り候次第茲に覺悟相定め候ことに候

第二　兩典戰死の後先輩諸氏親友諸彦よりも毎々懇諭有之候得共養子弊害は古來の議論有之（中略）特に華族の御優遇を相被り居り實子ならは致方も無之候得共却て汚名を遺すやうの憂ひ無之爲天理に背きたる事は致間敷事に候祖先墳墓の守護は血緣の有之限りは其の者共の氣を附け可申事に候（下略）

第三　資財分與の儀は別紙の通り相認め置き候其の他は靜子より相談可仕候

第四 遺物分配の儀は自分軍職上の副官たりし諸氏へは時計、メートル、眼鏡、馬具、刀劍等軍人用品の中にて見計ひの儀塚田大佐に御依頼申置き候大佐は前後兩度の戰役にも盡力尠からず靜子承知の次第御相談可被致候其の他は皆々の相談に任せ申し候

第五 御下賜品（各殿下よりの分も）御紋附の諸品は悉皆取纏め學習院へ寄附可致此の儀は松井、猪谷兩氏へも御頼み仕置き候

第六 書籍類は學習院へ採用相成り候分は可成寄附其の餘は長府圖書館へ同斷不用の分は兎も角もに候

第七 父君、祖父、曾祖父君の遺書類は乃木家の歴史とも云ふべきものなる故嚴に取纏め眞に不用の分を除き佐々木侯爵家又は佐

々木神社へ永久無限に御預申度候

第八 遊就館への出品は其の儘寄附可致申乃木の家の記念には保存無此上良法に候

第九 靜子儀追々老境に入り石林は不便の地病氣等の節心細しとの儀尤もに存候右は集作に讓り中野の家に住居可然同意候中野の地所家屋は靜子其の時の考へに任せ候

第十 此の方死骸の儀は石黒男爵へ相願置候間可然醫學校へ寄附可致墓下には毛髪爪齒（義齒とも）を入れて充分に候（靜子承知）

○恩賜を頒つと書きたる金時計は玉木正之に遣はし候筈なり軍服以外の服裝にて持つを禁じ度候

右の外細事は靜子へ申付け置き候間御相談被下度候伯爵乃木家は靜子生存中は名義可有之候得共吳々も斷絶の目的を遂げ候儀大切なり

右遺言如此に候也

大正元年九月十二日夜

湯地定基殿
大舘集作殿
玉木正之殿
靜子どの

希典　花押

神あかりあかりましぬる大君の
みあとはるかにをろかみまつる　臣希典上

うつし世を神さりましゝ大君の
みあとしたひて我はゆくなり　臣希典上

出ましてかへります日のなしときく
けふのみゆきに逢ふそ悲しき　希典妻靜子上

遺言中に、養子弊害といふことあつたので、一郎は、

一郎『お父さん。養子が後嗣ぐ家があるのに、それは可けませんか。

父『それはある。併し、男の兒が無くて、娘さんに婿養子を取つたのは、血緣が續くから可いのだ。それで無しに兒で無い者を兒といふ名義にして、其の男の兒に他から嫁さん貰ふと血緣が斷れて生きた兒は家の孫といふ名だけで、實は虛事だ。それでは同類の他の人類を欺すになる。依て遺言に、「天理に背きたる事は致間敷」と仰しやつたのだ。

大將が自殺なさつたは、二階の奧まつた八疊の間で、これは疊が敷いてある西洋室で、宮城に向いた方に机を置き、明治天皇の御影を其の上に奉安して、眞榊を供へ、辭世の和歌と遺書とを置き、正裝で端しく坐つて切腹せられ、夫人は大將の右

に列んで、端しく坐つて死なれたのだヨ。

一郎『夫人は何處から嫁入つて來られましたか。

父『薩州の鹿兒島藩士の、湯地定基氏の四番目の娘さんだ。遺言狀の宛名第一の、湯地定基氏は夫人の兄樣だ。貴族院議員だ。

一郎『他の宛名中のお方は、

父『大舘氏は大將の弟樣、玉木正之氏は甥御ぢやわい。此の玉木氏は陸軍の少佐だ。遺言書は外へも出された。宮內大臣をはじめ十通ばかり出された。

(十三) 學習院の生徒及び內外人の感激

一郎は學生だから、學習院の生徒が皆々、大きに悲しんだゞらうと思つて、其の様子をお父さんに問ひました。するとお父さんは、

『それは〳〵泣かしやつたとも〳〵。此の生徒は前にも曰つた歴〳〵々の御家のお兒様ばかりだ。昔しであれば大したお方々の御子孫それが院長たる乃木閣下を、「おぢいさま」と呼つて、馴ついて居られたのだ。此の生徒と申せば、今の皇太子裕仁親王殿下、又、雍仁、宣仁二皇子殿下も生徒の中で、三殿下も御悲しみ遊ばされた。それは大阪朝日新聞に、十四日に記者が丸尾御養育主任を訪ふたとき、丸尾氏が申されたことを話さう。

乃木院長が自殺されたといふ號外を見たのは今朝（十四日）で

あつた。靈柩青山御發車御奉送後、乃木邸へ行つて事實を確めた上、八時に東宮御所へ參内して、皇太子殿下を始め二皇子御揃ひの所で「乃木院長が昨夜、明治天皇の御靈轜が宮城發引の號報と共に切腹して相果てられた旨」を言上した處、三殿下とも驚愕かせられた御態で、皇子殿下には御言葉も御不揃ひに、「乃木院長が死なれた……」と、深い御憂愁に沈ませられ、雙の御目に御涙をさへ湛へさせられ、「嗚呼殘念なことぢや」と仰せられて御大息遊ばされ、私は何と申上げることも出來なかつた。と曰はれたさうだ。

學習院では乃木大將に教訓を受けて居た三百餘名の生徒は、ま

だ新學期の始業前であつたので、大將の薨去のことは何の通告も無し、只僅に世上の噂に依つて知り、涙を流して居たのであつたが、學習院では十六日の午後に生徒皆を集めて、御用掛の子爵、小笠原海軍大佐から告示をせられた。……午後の二時になると、一聲の喇叭の號音で、生徒は皆々大講堂に集まり、職員を前にして整列し、小笠原大佐は講壇に立ち現れ、霑ひ勝ちな眼をしばたゝいて、「諸君」と一聲低く呼んだ。滿堂の生徒は閒として聲無く、徒だ大佐の顏を見詰めて居るばかりであつた。大佐は徐々語を繼いで

「諸君は既に新聞紙上で、總ては御承知のことゝ思ふが、我等が愛慕崇敬して措かなかつた乃木院長閣下は、此の度急遽に薨去せ

られた。御記憶であらうが、昨年院長閣下が英國に御出發の砌、予は諸君に向つて、日夕偉人に對して居ると、追々に慣れて來て其の偉い所が知らないやうになり勝ちのものである。併し、離れると却つて其の德が明かになつて、いろ〳〵に思ひ出されるものであると云ふことを話したが、思はざりき予は、此の度諸君に向つて、此の言を再びせざるべからざることゝなつたのである。

去る七日に、予が旅順から歸ると、即日院長閣下の御呼びで、本邸に參上して、親しく四時間の長きに亙つて、種々の物語を承つた。而もそれは悉く學習院と其の生徒の上に就てゞあつた。今考へるといろ〳〵思ひ當る節もあるが、話が終つて邸を辭す

る時、院長は態々玄關まで御見送り下されて、特に其の日は温い温い握手を下すつて、予が門外に待たさせて置いた車まで、歩かうとすると、折節小雨がショボ〳〵降つて居たものだから、院長は後から、車を此處まで呼べと言はれた。それで予が其の儘歩いて行かうとすると、俺が居るので遠慮するなら、俺は中へ入ると曰つて、戸を閉てゝ入られた。それで予は車を呼込んで乘り、門を辭する時、後を振り返つたら、閣下は再び玄關の扉を開けて予の後姿を見守つて居られた。

諸君。……院長閣下は決して死んでは居りませんぞ。其の肉體は死んでも其の精神は瞭々として生きて居られる。諸君が斯の如

き御方を院長として戴いて居たのは、實に諸君の名譽であつた。院長在さゝる今後、それ見ろ學習院があの態になつたと云ふことを言はれてはならぬ。諸君は院長閣下が平生諸君に申された所に隨つて、學生の本務を守り、德を磨き、學を勵まねばならぬ。是れが院長閣下に對する第一の勤めである。此の外に予は何事も申上げることは無い。

と曰ひ了られるなり滿堂の職員と生徒とは、眞に流涕滂沱で、ホロ〳〵と涙を流して泣いて、中にも無邪氣な初等科の公達數名は、感極まつて其の場に倒れ、輕微い腦震盪を起した程であつたと云ふことだ。

これを聞いた一郎は、泣きつゝ聽いて居た溜涙が、一時にポト〳〵と落ち、これも感極まつての貰ひ泣、ワアッとばかりに聲を揚げ、又、母姉妹、お爨もワッと泣出して、二郎三郎長松權助男子の側もシク〳〵と、暫しは涙が止りませんだ。お父さんは始終、ハンケチ片手に眼を拭き〳〵、聲曇らして言つて聞かせ、折々は鼻うちかみ、話し了つてハンケチを、顏に當てゝ放しません。

乃木閣下が斯程まで、衆くの人を感じさせられる位だから、日本國中の人はおろか、外國の人まで感心して、同盟國の英國は勿論、一旦敵國であつて、戰爭に負かされた露國でさへ、感心して〳〵、乃木大將は日本だけの名將では無い。世界の名將だとまで賞め立てました。

其の他米國の新聞なども大きに感じて稱め立て、尙又、御大喪參列の、獨逸皇帝の御弟、ハインリッヒ親王殿下は、「乃木大將は忠誠だ。日本を少しでも解した外國人ならば、必ず如何にも……と感嘆せずには居られない。實に乃木大將には感服の至りだと思はない者はあるまい。此の感奮が崇高なだけに、民衆の心理に與へる影響の偉大なことは、殆んど豫知すべからざるもので、今後の日本は、更に長い歷史で研ぎ上げられた特質を、更に發揮するに違ひ無い。」と云ふ意味の意見を吐かせられたさうだ。

又、脣齒相寄ると云ふ程の、親しくしなければならない支那國、革命で以て今に各國から承認されて居らぬ國だが、上海人を感動させ、

外字新聞は、皆社説で將軍の光彩ある行動を稱め、個人主義の人々は「思ふに吾人は利己の念が餘り多過ぎる。今回の樣な献身的行動を聞くと、實に人生の最も崇高なる、他を愛する心を想ひ起させるもの無ければならないと、自分と自分を警しめて居ます。何しろ廣く、世界中に警告しられたものであります。少年諸君は、深くこれを心得なさい。

乃木閣下は、生涯人間の道を、口でばかり言ふので無くて、默つて實踐躬行せられ、此のやうに衆くの人に感心しられ、又、其の善い眞似もさせられる、手本も出されました。それに就て實踐躬行が出來る道筋を現した、道德系統一貫圖と云ふ、新案發明圖をば、書の尾りに

掲げます。能く觀て考へなさい。

少年文庫

乃木大將

（終）

道德系統一貫圖

道ノ本原天ニ出デ
延テ吾ガ躬行ニ及ブ

天津神與へ給ひし心根を
今明らめて圖とは爲しけり

右圖（篠田正作　謹按而畫）

少年文庫

大正元年十月十日印刷
大正元年十月二十一日發行

編輯者　橘國敏

發行者　大阪市南區大寶寺町中ノ丁廿二番地　島田幾藏

印刷者　大阪市西區阿波座二番丁一番地　堀越幸

發賣所　大阪市南區大寶寺町三丁目　教育書房
東京市神田區今川小路一丁目
大阪市東區南久太郎町三丁目　修文館
全國各書店に販賣す

定價金八錢

不許複製

270
439

少年文庫

1 出世くらべ 前編
2 出世くらべ 後編
3 海國男兒
4 未刊
5 彰義隊
6 白虎隊

7 乃木大將
8
9
10
11
12

近刊

定價壹冊金八錢
送料金二錢

終